熊本学園大学 外国語学部 第15号
英米学科 GAZETTE

英語教育特集号

令和元年9月

発行･編集:熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

英米学科教授　伊藤　友子（教育社会学）

昨年３月に、高等学校の「学習指導要領」が改訂されましたが、その方向性は、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換とされています。具体的には、2017年提言の「中央教育審議会答申」に、生徒の育成すべき資質・能力として、「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること、できることをどう使うか」「どのように社会と世界とかかわり、よりよい人生を送るか」という３つの柱が示されています。

すでに高校の先生方は、このような学力・能力を追及すべきものとして理解され、日々の教育の中で実践されています。しかし、そのような高校教育のもとで育った生徒が、入学後に経験する大学教育も、当然変革が必要となります。私たち大学教員も、入り口の入試だけでなく、日々の教育実践のなかで、その変化を受け止め、自ら努力することが重要になります。ましてや、教師を目指す学生を教育する私たち大学の責任は大変重くなったと考えています。

第14回英語教育研究会「小中高が連携した英語教育の取り組み」

熊本県立第二高等学校教諭　平井　和仁先生

8月24日（土）英米学科主催による英語教育研究会が開催されました。本研究会は英語教育に従事する本学科卒業生と本学学生･英米学科教員を中心に構成され、英語教育に関する情報交換を行っています。今回は熊本県立第二高等学校の平井和仁教諭に「小中高が連携した英語教育の取り組み」というテーマでお話ししていただきました。本号の巻頭言で伊藤先生も述べられていますが、新学習指導要領の方向性が資質・能力にシフトしたことに伴い、生徒個人の英語学習状況を一貫して把握し、目標・評価について校種を越えて議論する必要があること、さらに対応する現場の教員の悩み（生徒の学習習慣の確立ができていない、授業準備の時間が十分に取れない、生徒間の学力差が大きい、等）についても広く意見交換することができました。

ゼミ紹介（神本忠光ゼミ）

英米学科教授　神本　忠光（英語教育学）

今年度のゼミのテーマは、英語学習者の学習方略についてである。４技能のいろいろな学び方について理論的なことだけでなく、実際に試し、英語力をいっそう伸ばすことも目的としている。ここでは、帯活動的に行っている話す能力を伸ばす方法を紹介する。

学生の話す英語を観察していて、改善すべき点が少なくとも二つある。まずは、流暢さに欠ける。発話に時間がかかり､沈黙が目立つ。二つ目は､長く話せない。会話だと一言二言短めに時折発言するだけで、自分の「発言権」（floor）を易々と相手に渡してしまう。英語圏では基本的に、沈黙は金ではない。

これらの欠点を持つ学習者を訓練する方法として、Maurice（1983）の４／３／２ technique が参考になる。その基本は、同じ内容を違う相手に独白形式で繰り返す方法である。ただし繰り返すたびに、話す時間は４分→３分→２分と減っていく。１回目はその場で与えられた話題について話すので、言い淀み電文調になり､つなぎ言葉（filler）さえなく沈黙も多い。しかし、２回目以降は短期記憶に what と how が貯蔵されているので、取り出しやすくなっている。その結果、時間が短くなっても前の内容を話し終えられる。話し手は同じ内容を繰り返せば良いのだから徐々に流暢になり、沈黙が少なくなる。３回話したら、話し手と聞き手の役割を交代させる。

ゼミではこの基本形に２点修正を加えている。一つ目は、話す時間は全体的に長いので、すべて半分の２/1.5/１分に変えた。二つ目の修正点は「やり取り」を追加したことである。話し終えたら、質疑応答の時間を設ける。聞き手にはしっかり聞かせることになり、話し手も次に話す際に内容を発展させる接ぎ穂を入手できる。話す話題も日本語で既に知っている話題を選択すると、話しやすくなる。このような機会を定期的に設けることで、考えながら英語を話す過程に慣れ流暢さを獲得できる。話す能力は話させないことには伸びない。

英語を英語で教えるための参考書

望月正道他『英語で教える英語の授業』、大修館、2016 年、1,800 円＋税

英米学科教授　神本　忠光（英語教育学）

教職科目「英語科教育法」で履修生にミニ模擬授業を英語で行わせている。その様子を学生のスマホで撮影させ、その後自分の動画を見て発話を書き取らせる。使った教室英語の量や質を確認し、机間支援などの非言語行動も振り返らせることができる。2021年度から中学校でも英語の授業は英語で行うことになるので、実習先で戸惑わないようにすることも兼ねている。日本語でさえ緊張する状況なので、英語でだといっそう丁寧な予習が必要である。

場面別に教室で使う日本語表現に対して英訳を示した本は、既にかなり出版されている。それらの本はある英語表現をたまたま思いつかないという中・上級者向けである。一方上に挙げた本は、１時間の授業のいろんな構成要素（ウォームアップ･新教材の提示･説明･練習など）や技能別に、実際の授業をどう英語で行うかその過程を示している。英語で授業を行うことに不安を感じる実習生や、一層の研鑽を積みたい教師にとって一読に値する。

2019年度教育実習反省会　英語分科会

6月29日（土）教育実習反省会が行われ、英語分科会では８名の実習生と教職課程を履修する後輩たちが参加しました。会の進行はすべて実習生が主体となり、実習の反省と報告、来年度の実習生への助言などを行いました。実習生からはいずれも実習を終えたばかりの熱気が感じられ、実習がいかに大変なものであるかと同時に、実習指導の先生から学んだことの大きさが伝わりました。

英語分科会にて　実習生たち

教育実習で学んだこと

英米学科4年　杉山　玲奈

私は、熊本県立八代高等学校で３週間教育実習をさせていただきました。短い期間でしたが、普段の大学の授業では学べないような生徒の様子や指導方法、先生方の熱意など生の雰囲気を肌で感じ、様々な先生方とお話をさせていただき学んだことはたくさんありました。中でも、生徒と積極的にコミュニケーションを取るということが最も重要であり、私が最も心がけなければならない点であると感じました。先生方からは、普段の学校生活の中でしっかりと生徒達とコミュニケーションを取り学級の雰囲気や個々の生徒の特長を捉えるというのはもちろんのこと、授業中の発問や机間巡視中の個別指導など、生徒たちの中に自ら飛び込んでいくという姿勢が大切であるという助言をいただきました。実際に先生方や生徒たちと関わり、授業の技術面だけでない多くのことを学ばせていただきました。大変充実した、貴重な３週間だったと思います。

きみと未来をつなげる
クマガク

編集人　塩入　すみ（英米学科長）
〒862-8680　熊本市中央区大江 2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）　Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp